ドビー ファブリック組織の紹介*

(2) 模^も紗^{しゃ}織

白根睦巳**

1. はじめに

第1回目は夏を除いたオール シーズンの衣服として組織上から見た場合、最も一般的に愛用されている代表的な破れ斜紋の事例について説明した。

第2回目は春夏を対象にした組織に絞って考えてみたい。長年春夏のファッションの主流の座にあったポリエステルジョーゼットは、見た目には涼しそうでも、着ている本人は暑いという矛盾の何年かを経過した。

今回は蒸し暑い国内で、糸に撚りをかけて作られたボーイルとか、ジョーゼット類ではなく、最も通気性の優れている組織について解説することにする。

2. 模紗織 (Imitation gauze, Mock leno)

春夏の代表的衣服として、からみ織による透かし目のある紗(しゃ)織とか、絹(ろ)織がある。これらを生産する場合には、織機に特別な装置をとりつける必要があるが、単なるドビー織機で簡単に透かし目を作る組織に模紗織がある。“イミテーション ゴーズ”とか“モック レノ”といわれ、透き間のある表面効果から別名“パナマ”とも呼ばれている。

これは数本の糸が たてはたて、よこはよことそれぞれが接近するように組織させ、交互に配置すると透かし目ができる。

衣服としての通気性は最高で、外観も涼しい感じをもつ春夏の衣服としては欠かせない組織である。

絹、綿、羊毛の天然繊維を始め、化学繊維のフィラメント、紡績糸、混紡糸それらの交織など原素材に関係なく活用される。

プリント下地、後染、先染ものとしてシャツ、ブラウス、ボトム(スカート、スラックス)、スーツなどの衣

服のほか、ナプキン、刺しゅう用の基布など多目的に使用される。

組織と表面効果から模紗織を次の10のグループに分類することができる。

2.1 図1のグループ

このグループは模紗織の基本組織である。その内でも図(a)は たて、よこ各3本単位で一循環6本の組織が代表格で最も多く用いられる。

薄い織物で目付けを軽くしたいときはもちろんのこと、たて、よことも長く浮く中心部に太糸または表面変化のある糸にして、その両側を細糸にすると、太糸のみが強調されてツイード調の表面効果になる。シャツ、ブラウスからボトム、スーツにいたるまで使用する素材によって、いかようにも多目的に利用できる組織である。

迫力のある模紗織を表現したいときには、組織図としては図(b)より順次図(i)を活用すればよい。

図(i)は模紗織の基本組織を全部組合わせたフランス製ウールの製品で、組織と表面効果を最大限に発揮したアイデアが一杯あふれている製品といえる。大型、中型、小型の模紗織の集合体で、凹凸があつてザックリとした表面効果をもっているので、ジャケット、スポーティ感覚の衣服として最適である。

図1(a)

*Introduction to Design of Dobby Cloths. —(2) Imitation Gauze.

**M. Shirane, テキスタイル コンサルタント

図1(b)

図1(c)

図1(d)

図1(j)

図1(e)

図1(f)

図1(g)

図1(h)

図1(i)

2.2 図2のグループ

図1の変化組織で規則的に現われる透かし目が望ましいときとか、透かしを半分に減らしたいときに使用する組織である。ボイル糸を使用してこの組織を活用すると、スリッしにくい薄地の立体感のあるシャツ、ブラウス地の素材となる。後染による無地調から先染無地に、あるいは たて縞、格子縞とバラエティの展開に利用することのできるグループである。

図2(a)

図2(b)

図2(c)

2.3 図3のグループ

たて2本浮き、よこ1本浮きとするか、よこ2本浮きに対して たて1本浮きとする組織で、透かし目が目立たないで通気性のある織物になる。模紗織にもこのような組織があるので紹介する。この組織の利用方法は図2と同様である。

図 3 (a)

図 3 (b)

2.4 図 4 のグループ

組織学上からは、模紗織とはいえないが、表面効果の点からあえて1グループとして組入れた。模紗織と区別がつかないほど通気性があり、迫力のある表面効果の組織である。

絹、綿、梳毛糸などによる後染、先染ものはザックリとしたラフ感に富み、スーツ、ジャケット、ボトム、コートに適した組織である。

図 4 (a)

図 4 (b)

図 4 (c)

図 4 (d)

2.5 図 5 のグループ

図 5 (a) から図 5 (f) までは、模紗織の基本的な組織であるが、この組織の特徴は たて浮き、よこ浮きの各糸がそれぞれ平行に併列し、その境目に明瞭な透かし目ができる。

太糸を使用してこそこの組織を生かせば、スポーティな衣服に最適である。通気性もまた抜群である。図 5 (g) は応用組織で、平織と模紗織の組み合わせにより細糸でも糸が布の中でスリップせず、シャツ、ブラウス、スカート地として面白い表面効果のある組織である。

図 5 (a)

図 5 (b)

図 5 (c)

図 5 (d)

図 5 (e)

図 5 (f)

図 5(g)

2.6 図 6 のグループ

たて糸がよこ糸に対して3本浮くものが2本、よこ糸がたて糸に対して3本浮くものが1本の模紗織で、このような組織もある事例として紹介する。

先染によるたて縞、格子縞などを配すると、部分的に断続した柄となり、ザックリとしたしゃれた遊び着に好適である。

図 6

2.7 図 7 のグループ

地組織を基本的模紗織にして、他の組織で格子柄を構成させるグループである。後染によるパナマ格子としてシャツ、ブラウス、スカートなどの薄ものから厚手の服地に至るまで広範囲に使用される組織である。

先染ものでは、地組織の模紗織地に縞や格子縞を組入れたり、格子ごとに配色を変えたりして、組織による格子柄との複合でこのグループならではの表現がなされる。

2.8 図 8 のグループ

応用組織で、平地に模紗織で柄を構成するグループである。意匠によってどんな柄でも生み出すことができ、プリント下地、後染から先染ものでは今流行のシャンブレー、たて縞、格子縞など限りなく製品展開ができる。

図 7(a)

図 7(b)

図 7(c)

シャツ、ブラウスはもちろんのこと、スカート、スラックス、スーツ、ドレスなどに効果的である。

図 8(a)

図 8(b)

図 8(c)

図 8(d)

図 8(e)

図 8(f)

図 8(g)

2.9 図 9 のグループ

応用組織で、斜紋織と模紗織の組合わせによって柄を構成するグループである。斜紋の浮く長さが比較的長いので、迫力のある斜紋線が山となり、透かし目のある模紗織が谷となって立体感のある織物となる。

ジャケット、スカート、スーツ地などに適している。

図 9(a)

図 9(b)

図 9(c)

2.10 図10のグループ

先染の模紗地に、たて刺しこによって模様を部分的に配するグループである。地組織が粗いので水玉とか四角とか、比較的に単純な柄の構成とならざるをえない。

夏の楽しいシャツ、ブラウス地として開発したいグループである。

図10

3. まとめ

(1)模紗織は通気性が最も優れている点から、春夏の衣服には欠くことのできない適切な組織である。

使用する原糸素材、表面変化のある素材、太、細の番手差のある糸、これらの組み合わせなどにより、同じ組織でも千差万別の表面効果のある織物が生み出される。多に活用されるべき組織である。

(2)基本組織は見本がなくても組織図としてつくれるので、考えられる範囲で掲載した。

今回は細糸と太糸の組み合わせによる立体感のある織物をテーマに紹介したい。

サフィックス

ドレープ係数の感じ

衣服の布地はその使用目的において、昔の袴、袴のように位階、身分の象徴としての威儀を正すことが目的で、着用者の体形、内容、人物には関係なくいかめしい服装を保持しなければならないものがあつた。

時代が移り変り最近肉体美の強調～誇張、特に若い近代女性の曲線(美)をできるだけ素直にありのままを表現するような衣服の要望が強くなり、さらに被覆効果も必ずしも大きくなく、時には透明とまではいかないがシースルーという言葉が魅力的となつた。

また、スーツ、ドレスは最近次第に薄くなり、保温効果を期待する方が無理な注文といえるかも知れない。その代りにファッション的に肩や胸、腰の線あるいはさうそうと歩行中のフレアードスカート^{フレアード}の襷^{のり}のみらめき、時には寢室の二重カーテンの内側のレースカーテンの逆アーチ形の襷^{のり}の曲線の形など、布であるがための静的、動的挙動の美的表現の方法としてドレープ係数がある。

Drape とはもともと美的襷を意味するものであるが、最近では美的垂れ下がり(必然的に襷ができる)を示す意味にも使われており、ドレープ係数は布の垂れ下がり性の程度を示すものとして一般に採用されている。

ドレープ係数の測定法は、円形布の円板からの垂れ下がりによってできた水平面への投影の大きさから計算されるが、そのドレープ係数は0～1の値の範囲にある。布が完全に垂れ下がった場合がドレープ係数0、全然垂れ下がらない場合1で表わされる。このことは内容としては垂れ下がりにくさを表わす係数となっていることから実感として頭の中が混乱し、学生に説明する場合にも都合が悪い。

ドレープ係数はそもそも Dr. Humberger (1946) によって提称されたもので、以来そのままの形で国際的に採用されている。

(F)